フランス語動詞courirの意味論的研究：同一性の把握

伊　藤　達　也

0. はじめに

フランス語の動詞courirは，日本語では「走る」と訳され，「足を使った高速での移動」を第一に意味すると考えられる．しかしcourirの様々な用例を観察すると，必ずしもこの意味だけでは網羅しきれない場合が多数ある．本稿の目的は，courirの生み出す多様な意味の中の同一性を，この語彙の内的スキーマから把握することである．本稿の最後に，courirの単独性を際立てるため，日本語の動詞「走る」の用例を分析し，この二つの動詞が，指示対象の類似に基づいて相互の翻訳に使用されるにもかかわらず，内的スキーマにおいては隔たっていることを示す．また本稿はこの同一性からどのようにして意味の多様性が生まれるかについての別の論考によって補完されることになる．

1. Courir の記述

1.1. 語彙論的理解の問題点

直感的な意味の把握の引き起こす問題点を理解するために，しばしば挙げられるcourirの二つの意味的特徴を確認することから始めよう．(i) まずcourirは，生物を主語に取る「自動詞」であること．(ii) 次にcourirの意味

は「足での高速移動」にあること（代表的辞書類から引用するとcourirの第一の意味は「身体を一方,次にもう一方の脚に交互に預けながら飛躍的連続性によって，歩行よりも一般的に迅速なやり方で移動すること[1]」あるいは「地面に支えを取りながら二足あるいは四肢の連続的かつ加速的な運動により高速で移動すること[2]」）である.

実際，この「第一義」は，文脈を離れた語彙から推論されるイメージである．したがって実際の使用の中では，上の二つの特徴が満たされない場合もある．例えば，(i) の自動詞性に関して，次の（1），（2）のようにcourirが他動詞として使用される例も存在する.

（1）Il <u>court</u> les filles.（彼 / courir（三人称・単数・現在）/ 定冠詞 / 娘（複数））=「彼は女の子たちを<u>追いかけてる</u>.」

（2）Il ne faut pas <u>courir</u> deux lièvres à la fois.（義務のマーカー（否定）/ courir / 二つの / 兎（復）/ 同時に）=「二匹の兎を同時に追ってはならない.」=「二兎を追う者は一兎をも得ず.」[3]）

直接目的語（les filles, deux lièvres）を伴う（1），（2）が示すように，実際にはcourirは他動詞用法を持っている．courirは固定的な自動詞ではなく，頻度の差こそあれ，自動詞用法と他動詞用法をもつ動詞なのである[4].

特徴（i）のもう一つの条件，生物が主語となるという特徴についても(3)-(7）が反例となろう.

（3）Le bruit <u>court</u> que ….（(定冠詞 / 噂 / courir（三人称・単数・現在）/ 補語標識 =「.... という噂が<u>流れている</u>.」）

（4）Ses doigts <u>courent</u> sur le clavier du piano.（所有形容詞 / 指 / courir（三人称・数 / 上に / 定冠詞 / 鍵盤 / の / ピアノ）=「彼（女）の指がピアノの鍵盤の上を<u>走る</u>. 」）

（5）Ces montagnes <u>courent</u> du nord au sud.（指示形容詞 / 山（複数）/ courir（三人　称・複数）/ から / 北 / まで / 南　=　「これらの山々は北か

ら南へと走っている.」)

(6) Le Rhône court du nord au sud.(定冠詞 / ローヌ / courir(三人称単数現在) / から / 北 / まで / 南 =「ローヌ川は北から南へと流れる.」courir = couler)

(7) Le bail court à partir du 1er janvier.(定冠詞 / 賃貸契約 / courir(三人称単数現在) / から / 一月一日. =「賃貸契約は1月1日から有効である.」)

しばしばメタファーという説明がこれらの例に対しなされることが予想されるが,元来メタファーは,単語の解釈の推論による転移を意味する修辞学の概念であり,言語学の現象を説明するのに適切かどうかは慎重な判断が必要であろう[5]. 実際,以下の例(8)-(10)のcourirの使用に関しては「走る」という意味からの直接的ないかなる「転移」も認めにくい.

(8) Il court un danger(彼 / courir(三人称単数現在) / 不定冠詞 / 危険 =「彼は危険にさらされている」)

(9) Au Québec, 1 enfant sur 4 court le risque de devenir analphabète.
(で / ケベック / 1 / 子供 / につき / 4 / courir(三人称単数現在) / 定冠詞 / 危険 /の / なる / 文盲 =「ケベックでは4人に1人の子供が文盲になる危険にさらされている.」)

(10) Ce spectacle est très couru.(この / 催物 / である / 非常に / courir(過去分詞[6]) =「この催物はとても人気がある.」)

本稿ではこのような第一義からもその転移からも説明できない例こそが動詞courirの多様性の中の統一性を把握する為の重要なデータと考える.

メタファーによる転義の説明とともによく使われる,意味の列挙による説明. すなわち,courirは自動詞の場合は「走る」,他動詞の場合は「(走って)追いかける」と多かれ少なかれ連続性のある列挙を用いることも慎ま

なければならない．本稿では，同じ動詞が自動詞と他動詞の場合に二つの意味を持つというのではなく，同じ語彙は根本的には同一のスキーマを持ち，自動詞と他動詞という使用環境の（したがって相互作用の働きの）ちがいにより多様な意味が構築されるとする見方をとる．

環境との相互作用が意味の多様化の源泉とする見地には，courirに即しては，以下のzeugmaの考察は示唆的であろう．

（11）Il court un danger et une périlleuse carrière.（彼 / courir（三人称単数現在）/不定冠詞/危険/そして/不定冠詞/危険な/ 職務）

ここに現れる動詞courirが翻訳困難なのは，un danger（危険）の目的語としては「身をさらす」（courir = s'exposer）の意味で，une périlleuse carrière（危険な職務）の目的語としては「参加する」（courir = être engagé）の意味で使用されているからである．これがzeugma（くびき語法）と見なされるのは，最初の目的語un dangerの生起に伴ってcourirに与えられた意味と二番目の目的語 une périeuses carrièreの要求するcourirの意味とが衝突を起こすからである．Courirはとりわけ他動詞としての使用において，目的語が意味構築に大きな影響を与えていることが分かるだろう[7]．

1.2. 作業仮説

上記の事実をふまえ，本稿では，様々な使用において異なる意味が構築されていていたとしても，同一語彙が使用されていれば何らかの同一性があるという作業仮説を立てる[8]．この同一性の仮説は，「第一義」とその派生として「周縁」的な意味を記述することを戒める．我々の立場は，最も代表的な意味も最も周辺的な意味もその意味構築のプロセスは同じであると見なす．この同一性は，「第一義」とは異なり，意味の多様な姿を通じて，その源泉として把握される．本稿の分析の対象であるcourirに即して

言えば，意味の多様性を「走る」という本義が転じたメタファーとして説明するのではなく，courirの根本的スキーマが様々な周辺語彙との相互作用を通じて作り出された結果と考えるのである．この仮説により，courirの生み出すもっとも奇妙に思える意味（8)-(10）でさえも，働いている意味構築のプロセスには同様の規則性があると仮定される．

この意味構築のプロセスは発話（énonciation）すなわち，言表（énoncé）の産出を通じて成立している．発話は，語彙単位に固有の抽象的なスキーマを実際の言表の中に発現させるものである．すなわち発話を通じて，間主体関係，文脈，他の周辺語彙との関係性の中に語彙が生起し，他の要素との相互作用が生まれ，意味が構築されるのである．本稿では発話こそが意味の多様性の源泉であると見なす発話主義とともに，意味は発話以前に存在しておらず，発話を通じて構築されるという構築主義，また意味は世界にではなく言語の中に存在するという言語内的意味論の立場を取る．

この一般的な原則に加えて，副次的な仮説が必要となる．Courirは動詞という品詞に属しており，また動詞は自動詞と他動詞に分類できる[9]．動詞は述語性をもち，フランス語では，主語に応じて活用し，時制・アスペクトなどの限定を受けるなど屈折語としての特徴を必然的に持っている．他動詞の場合は明確であるが，自動詞の場合であっても，動詞は二項間の関係性を規定するものと特徴づけられる．実際，語彙は品詞的スキーマの性質と語彙・概念（notion）的なスキーマを兼備している．すなわち動詞courirは名詞coursと共通の内的スキーマを持っていると考えられるが，それぞれ異なる品詞の鋳型にはめられているため，異なる機能を発揮するのである．

本稿のアプローチは，プロトタイプを使って中心的意味を定義する認知言語学のアプローチとも異なる．プロトタイプによる定義はしばしば，時速6kmまでが「歩く」（低速移動）でそれ以上が「走る」（高速移動）を意味する，あるいは「歩く」ためにはどちらかの足が地面についていなけれ

ばならない等，それぞれの活動を認知可能な言語外的特性で定義する[10]．しかしながらこの区別は，言葉の区別ではなく，移動方法の区別である．本稿では，言語活動を人間の認知能力の下位に置くのではなく，それ自体自律した活動とみなし，固有の領域として把握しようとする．

また，本稿の立場は，Saussureの言う「差異」が意味を生み出すという考え方とも異なる[11]．「差異」が生み出す意味とは，記号「走る」が他の記号「歩く」との差異において「走る」を意味するという考え方である．Saussureにおいては（少なくとも『講義』においては）signifiantとsignifiéは一対一の対応関係をなし，多義性の問題は介入しない．本稿ではcourirの多義性を通じてこのシニフィアンの意味論的本質を記述しようとする．日本語でも「走る」と「歩く」には二項対立的相補関係があるのではなく，それぞれの語彙単位に単独性が存在する．本稿は，「意味は言語の内部にある」とするSaussureの自律主義的視点を追し進め，意味が発話以前に，概念や事物として存在し，語彙はそれを名指すものとして存在しているのではなく，語彙の意味は発話を通じて，言語の中に構築されるという立場を取る[12]．発話がなければ，語の意味は脱文脈化された語彙的意味，理想化された概念との恣意的な結びつきである．

2. Courirの意味構築プロセス

以上の作業仮説に基づき，courirの内的スキーマを考えると，現時点で以下の定義が浮かび上がる[13]．すなわちcourirは「(a) XとYとを関係づける．(b) X（主体）にとってY（目的）は接近不可能であると同時に接近しなければならない対象である」を表す．この定義は二つの要素XとYを含むが，自動詞と他動詞の用例いずれに場合にも存在する内的スキーマである．XとYは主語と目的語という語彙の形では必ずしも現れないが，courir自体が要求する要素である．分析的には (a) は動詞としての品詞的スキーマ，(b) がcourirの語彙的スキーマである．

このスキーマからどのように個々の意味が生じるのだろうか．まずJe cours.「私は走る」の場合，歩行よりも早い速度での移動を意味する自動詞表現である．ここではXはje「私」であるが，Yは語彙的には明示されていない．しかし，到達不可能な目的Y（非明示）に対して関係付けられることで，そこへ向かう運動が私に課されるのである．それが「走る」という意味を生む．

注意しなければいけないのは，目的（性）は抽象的な対象であり，場所ではないことである．Courirには目的もなく走り回る（parcourir）の意味の場合も存在する（J'ai couru toute la ville sans le trouver）．到達不可能な目的へと到達するべく関係付けられる主体がjeである．すなわち，courirにあっては，むしろ目的性は絶対的に到達不可能である目的地へ走っていくということではなく，「走る」という行為自体が目的性への接近不可能という定義から構築される意味なのである．Courirはその意味で，移動ではなく活動である[14]．

他動詞用法の場合XとYは文脈に登場する．Il court les filles（彼は娘たちを追いかける）ではil（彼）がXでありles filles（娘たち）がYである．Courirはここでは，走ることよりも，接近するたびに，対象が逃げていくことを意味している．Courir deux lièvresの例も，兎を追い求めながら逃げられることを意味しており，「走る」ことよりも，「Y（この場合は「兎」）に接近しようとするのだが，接近できない」という意味が強い．

Il court après la gloire（la richesse, le succès）（彼は栄光（富，成功）をむなしく追い求める）も同様に他動詞の例だが，抽象的な対象が目的語である．「走る」という意味から離れ，手に入れられないものを追いかけるという意味である．前置詞après の存在によって「むなしく」「無駄に」という意味が強められ，失敗のニュアンスが付加されている．

目的語がないという意味では，他動詞用法ではないもののTu peux toujours courir!（むなしく追い続けていろよ！）もpouvoirやtoujoursの影響で

courirが「むなしく追い求める」を強く意味している例である.

Ce spectacle（ce restaurant）est très couru.（この催し（レストラン）は人気がある）ではspectacleが接近不可能であると同時に接近が義務づけられた対象YでありXは不特定多数である．当然ここでも「移動」の意味は薄く，接近の義務とその不可能性が同時に喚起されている.

ある領域が与えられるとその中を走り回る，parcourirの意味をもつことがる.「広がる」,「流れる」という意味の場合，Les montagnes court du nord au sud.であれば山々が北から南へ広がっている．Cette histoire court les rues.北から南，街路をなどと範囲を限定されることでcourirはparcourirの意味を構築する.

3.「走る」

ここで，日本語の動詞「走る」について，courirとの重要な相違点を3点指摘しよう．まず第1に日本語の「走る」は，courirが自／他両方の使用が可能であるのに対し，安定的に自動詞である．確かに，対格相当の「を格」を従える例は以下のように存在する.

（12）100メートル走を走る
（13）マラソンを走る[16]
（14）グランドを走る
（15）市内を走る

以上の例は典型的なをの用法ではなく,「踊り（タンゴ，バレエ，ルンバ）を踊る」や「歌（ブルース，シャンソン，カンツォーネ）を歌う」のような同語反復的な擬似他動詞（12）-（13）か,「空を飛ぶ」,「海を泳ぐ」ように直接目的語ではなく，動詞の行為の及ぶ範囲を示す「を」の用例である.

（16’）の直訳の日本語（16）のように目的語を伴うことはできない.

（16）「*同時に二匹の兎を走る」
（16’）Courir deux lièvres à la fois

また（17）と（17’）では意味が大きく異なっている.

（17）「女の子たちの後を走る」
（17’）courir après les filles

（17）は空間的に「女の子たちの後ろで走ること」を意味しているが，フランス語の（17’）は「女の子たちを追いかけては逃げられる」という意味であり，この場合「後ろを走る」という意味は認められない．courirの場合と違い，「を」で導かれる語彙の要素は「走る」の意味に直接的に関与せず，別々に意味を作っている[16].

第２の特徴として,「走る」に名詞を後続させるには「に格」が使用（「悪事に走る」「非行に走る」）される．この場合，名詞に制限があり，避けるべき事柄（極端，賭博，感情）しか出現し得ない.「政治活動に走る」などの場合でも「過激な / 非合法の政治活動に走る」などの否定的な形容詞を加えた方が据わりが良い．誘惑，重力を持って，抵抗力がなければ安易にそこへ引きずり込まれる対象が語彙単位「走る」によって文脈に要求されている．一般的に良いことや中立的なこと（「政治活動」）であっても，悪いことというバイアスが「走る」によってかかる.

第３の特徴は「走る」は主語に乗り物を取ることができる．（18）はcourirとその主語を用いてフランス語には直訳できない.

（18）船 / 電車 / バス / 自動車が走る

フランス語のcourirとは異なり，日本語の「走る」には「滑らかさ」「抵抗のなさ」が深く関わっている．この特徴は，連用形が名詞として機能する「はしりの魚」「桜えびのはしり」など，旬のものの早い出現を表す「はしり」の用例の中にも見て取れる．この場合も「第一義」としばしば見なされる「足での高速移動」とは大きく隔たった意味だが，courirとは違う「走る」の内的スキーマから構築されてきていると考えられる．名詞だけでなく，複合動詞としても「はしりがき」のように「走り」が「はやく」書くという意味に用いられることがある．また,「早い」の意味は「はしり知恵（物事を早のみこみして，考えの浅いこと）」などでは素早く現れて消えるというネガティブな意味を持つ.

このように「走る」とcourirは,「語彙的意味」は同じとはいえ,それぞれの多義を成り立たせる内的スキーマには大きなちがいがある.「走る」のスキーマを抽出するのは本稿の範囲を越えるが,「避けるべき対象への抵抗の消滅」と仮に形容できる内的スキーマが関連づけられるかもしれない.対象研究をさらに深められる場があればより広範囲のデータに基づく精緻な特徴付けがなされるべきであろう．少なくともここでは「走る」との比較はcourirの単独性を確認することが目的である.

4. 結論にかえて

語彙的意味を中心に考えるとcourirと「走る」は等価と見なされうるが,この二つの語彙単位の各言語内での固有性をそれぞれの表現の持つ意味の多様性から考えると，各語彙のもつ根本的なスキーマは大きく異なっている．Courirは「接近すべき目的への接近不可能性」が基本構造としてあり,その結果,「足を速く動かして移動する」を含む様々な意味が文脈に応じて生まれて来る．他方「走る」は,「避けるべき対象への抵抗の消滅」という基本構造が仮定され，そこから高速移動という意味が生じ，また乗り物が主語になれるなど，courirにはない単独性がある.

本稿では，屈折語であるフランス語，膠着語である日本語の事例を見たが，孤立語である中国語やクメール語にも意味構築における同様のメカニズムが指摘され（Chan（2002），劉（2005））ており，人間の言語活動における意味産出に一般性のある特徴であるように思われる．

同一のスキーマからどのようにして様々な意味が生まれてくるのか，意味の多様化のプロセスの精密な記述が次回の課題となるであろう．

---

[1] Se déplacer par une suite d'élans, en reposant alternativement le corps sur une puis l'autre jambe, et d'une allure généralement plus rapide que la marche (*Petit Robert*)

[2] Se déplacer rapidement par un mouvement successif et accéléré des jambes ou des pattes prenant appui sur le sol. (*TLF*)

[3] ＝ qui court deux lièvres n'en prend aucun. も同じ意味で使用される．

[4] 日本語ではこれらの例は「走る」を用いては翻訳されない．また後に見るように日本語では「走る」は主語に生物を必ずしも要求しない．例えば「車が走る（*Une voiture court.）」は日本語では問題ないが，フランス語では「彼は車で走る（Il court en voirure.）」という主語に生物を立てた構文を取らねばならず，車を主語にできない．（ただし実例を調査すると，関係節の先行詞としてla voiture qui court / a courru …（... 走る / った車）の形で使用される例もある．）これはフランス語と日本語の違い以上に，二つの動詞がそれぞれ固有的な振る舞いをするからであり，この固有性の問題については後に戻る．

[5] メタファーに注目することで認知言語学を開いたLakoff & Johnson（1980）Lakoff（1987）などの重要性を否定するものではない．

[6] この意味では過去分詞形で用いられることが多い．

[7] Courirに限らず，程度の然こそあれ，他の動詞，他の語彙単位についても多かれ少なかれ当てはまることは言うまでもない．

[8] この考え方はSaussure（『講義』）の考え方よりも，後期Wittgensteinの意味の使用説に近いと言えるNormand（Normand & Culioli 2005）はしばいしばCulioliの考えとWittgensteinの考えの近さを指摘している．

[9] 代名動詞se courirの使用は限られており（Mon chien se court après la queue.），再帰性の付加が見られるが，他動詞の場合と異なり，根本スキーマと積極的に相互

作用をする力を持たない．品詞は異なるが，Courir après などの前置詞との組み合わせも根本スキーマを変えずaprèsの意味を付加するにとどまっている．なおCourir après についてはFranckel & Paillard（2005）に記述がある．このco-texteの意味構築への関わり方については別の機会に論じたい．

[10] フランス語に「歩く」に相当する動詞がないことはしばしば学習者の気づくところである．英語のwalkに相当する動詞はaller à pied「徒歩で行く」［行く・で・足］であり，marcherは日常的にはそれほど用いられない．それに比べれば，courirは「走る」ないしrunと同じように使われる．

[11] Cf. de Saussure, F. (1916) *Cours de Linguistique générale*.

[12] Cf. de Vogüé (1992) : C'est parce que l'énonciation est conçue comme un processus de constitution de sens (et non comme l'acte d'un locuteur) que le langage doit être conçu comme une activité. Le sens est construit, énoncé par énoncé.「なぜならば発話は（発話者の行為としてではなく）意味の構築の過程（プロセス）として考えられ，言語活動は（ひとつの純粋な）活動として考えられなければならないからである．言表ごとに，意味は構築される．」

[13] 本稿の執筆に先行して，2010年7月18日，日本フランス語学会第265回例会（於慶応大学），2011年5月14-15日，日本語とフランス語：対象言語学的アプローチ（於名古屋大学）でcourirについて口頭発表をする機会を得た．とりわけFrance Dhorne，小熊和郎，Irène Tamba，藤村逸子先生方の助言が仮説構築に重要な役割を果たした．この場を借りて感謝したい．

[14] Courirは複合時制の助動詞としてavoirを取り，ほとんどの移動動詞がêtreを要求するのと対照をなす．

[15] 仏語でもcourir un marathonはインフォーマントによると英語のrun a marathonの影響が強いようある．「100メートルを走る」courir 100 mètresは問題のない言い回し．

[16] Tsunoda（1985），角田（2007）のように他動詞の典型的な特徴に「目的語の性質の変化」を重視するならばcourirも含め「走る」は他動詞用法を持っていても，他動詞性の弱い動詞であると言える．

参考文献

Culioli, A. (1990-1999) *Pour une linguistique de l'énonciation* 1-3, Ophrys, Paris.

Culioli, A., Cl. Normand (2005) *Onze rencontres*, Ophrys, Paris.

Chan, S. (2002) *Identité et variation des unités de langue : étude d'une série d'unités*

lexico-grammaticales du khmer contemporain, ANRT, Lilles.

De Vogüé, S. (1991) “Transitivité comme question théorique”, *LINX* 24, Paris.

De Vogüé (1992) “Culioli après Benveniste : énonciation, langage, intégration”, *LINX* 26, Paris X

De Vogüé, S. (2004) “Syntaxe, référence et identité du verbe *filer*”, *LINX* 50, Paris 135-167.

De Vogüé, S. (2006) “Qu’est-ce qu’un verbe?”, *Lebaud et al*.

Filmore, Ch. J., B.T.S. Atkins (2000) “Describing polysemy: the case of crawl” in *Ravin and Leacock* (2000) 91-110.

Franckel J.-J., D. Paillard (2005) *Grammaire des prépositions*, Ophrys, Paris.

Hopper, Paul J., S. A. Thompson (1985) “The iconicity of the universal categories “nous” and “verb”. In John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: John Benjamin, 151-183.

Lebaud, D. C. Paulin, K. Ploog éds. (2006) *Constructions verbales et productions de sens*, Presses Universitaires de Franche-Comté.

Normand, Cl. & A. Culioli (2005) *Onze rencontres*, Ophrys, Paris.

劉綺紋（2005）『中国語のアスペクトとモダリティ』大阪大学出版会

Ravin, Y., C. Leacock (eds.) (2000) *Polysemy*, Oxford University Press.

Tsunoda T. (1985) “Remarks on Transitivity”, *Journal of Linguistics*, 21, 385-96.

角田三枝，佐々木冠，塩谷亨（編）（2007）『他動性の通言語的研究』くろしお出版

Victorri, B., Fuchs, C. (1996) *La polysémie*, construction dynamique du sens, Hermès, Paris.